

## 私のふるさと

山崎 治

出身が札幌と話すと、「いい所ですね」と言われる。食べ物がおいしい。空気がおいしい。夏は涼しく、四季もはっきりしていて過ごしやすい。街並みが綺麗。道路も住環境もゆったりしている・・・etc。確かに、いい所と思う。出身者として、褒められて悪い気などするはずもない。しかし、私にとっての札幌は少し違う。

私は昭和28年に札幌で生まれた。以来高校卒業まで、札幌で育ったが、私の年代で札幌生まれで札幌育ちという人はめずらしい。今でこそ人口196万人の大都市も私の生まれた時はまだ22万人だった。北海道の人口はこの頃450万で、今が550万であるから、いかに札幌への一極集中が進んだものか、感慨もひとしおである。札幌は転勤も含め、転入してくる人が多く、この為か、とにかく私の小学校の友達に札幌生まれはいなかった。

ご存知の通り、その後札幌は昭和35年、50万突破を皮切りに急拡大し現在に至る。何処の地域も同じとは思いますが、50年昔と比べるととても便利で快適になり、豊かになった。しかし、ある程度歳を重ねた者にとっての「ふるさと」は幼い頃の郷愁の中にある。私の子供の頃の札幌に触れてみたい。

今は何処も温暖化で、札幌の夏もずいぶん暑くなったが、子供のころはお盆を過ぎると、肌寒かった。札幌は冬が長い。半年近く雪に埋もれた生活だ。雪は今より多かつたし、何より今とは除雪の環境が全然違うので、雪は高く積もってゴールデンウィーク近くまで解けない。子供は風の子、「かまくら」や「雪の要塞」、「雪の土俵」など雪遊びには、事欠かなかつた。ただ毎年の事だが、雪解けの時期は大変だった。当時は舗装道路がまだ少なく、雪解け時期は道路が泥沼状態だった。自動車がまだ少なかったことが救いか。

この時期、歩く時は（もちろん履いているのはゴム長靴）、泥でズボンを汚さぬよう、そっと歩

くよう母親からやかましく言われた。このためか、私は今もすり足気味に歩く。女房からは、「変な歩き方」と馬鹿にされている。冬の話が長くなったが、春・夏・秋は短く、正にあつという間に通り過ぎる。それがまた四季の移ろいを鮮明にして、どこか物悲しい札幌の魅力となっている。

札幌は人工都市といわれる。日本には希な人工都市が2つあるそうだ。1つは明治維新後、北海道開拓の中心拠点として、アメリカをモデルに作られた札幌。もう1つは中国をモデルに作られた2千年の歴史を誇る京都である。全く違う都市ではあるが、外来の文化を参考とし、取り入れながら、日本的に独自の文化・文明を構築してきたという点では共通するものがあるように思う。碁盤の目に区画された市街地を始め、札幌は全てが計画的に作られてきた。北日本最大の歓楽街「すすきの」の前身である遊郭も例外ではない。遊郭はその後、白石という所に場所を移したが、「すすきの」は北の都、札幌のシンボルとして発展を続けた。もちろん私にとっても・・・。

北海道は歴史が浅い。これは、どさんこ（北海道人）にとって劣等感である。クラーク博士の「青年よ大志を抱け」はあまりにも有名であるが、この言葉はどさんこにとっては、学生に対してではなく、歴史も、何もない所から開拓の精神で立ち向かっていくどさんこ全員に向けたエールである。

最後に、北海道の先住民族アイヌについて少し触れたい。明治維新前後の北海道の人口約12万人の内、アイヌ人は2万人であったが、その後アイヌ人はほとんど増えていない。私たちが開拓者精神溢れる「どさんこ」としての誇りを持つのは悪い事ではないが、発展の犠牲となってきたアイヌ人の存在を忘れてはいけない。

平成30年は「北海道」と命名されてから、ちょうど150年となるそうだ。命名者である松浦武四郎はアイヌの人々が北海道で安心して暮らしていけるようにしたい、という強い思いを持ち、行動した人物であった。

札幌から北海道へ話が広がってしまったが、ふるさとの昔に想いを馳せてみた。

